

《調査報告》

中国清末民初期の歴史教科書に関する調査報告

—大連・長春・北京の大学図書館を中心に—

鈴木正弘

はじめに

2004年8月21日～9月7日にかけて、大連—長春—北京—大連という経路で、中国を旅行してきた。ほとんど中国を旅行したことのない筆者にとっては、様々な点で得るところの大きな旅行であった。今回の旅行では史料調査を目的の一つに掲げ、若干の史料に目を通すこともできた。筆者は中国の事情に通じている者ではなく、その道に通じた方から見れば、ささやかな内容の調査ではあろうが、筆者には得るところの大きな旅行であった。そこで、旅行日記を基に、閲覧できた史料を中心に整理を試みることにした。なお行論上、中国の状況の紹介なども織り交ぜたいと考えた。従って直接史料調査に関係しない事柄についても論及する。冗長な点は寛恕賜りたい。

1. 出発に先立って

筆者は、2003年4月より、広島大学大学院・教育学研究科・博士後期課程において、中国教育史の研究に取り組むこととなった。また埼玉県教育委員会・狭山清陵高校の格段の配慮によって、2004年4月より1ヶ年間の期間で、広島大学に長期研修教員として派遣されている。長期研修の主題は、清末期における歴史教育に関する研究であり、併せて国際理解教育推進の方向性を検討することである。当初、東京都立図書館実藤文庫や国立国会図書館等、国内に所蔵されている史料を中心に研究を進めてきたが、中国における史料調査の必要性を感じるに至るまでにさほどの時間はかからなかった。

今回の旅行に先立ち、2004年4月2日より4日にかけて、杭州において開催した国際研究集会（アジア教育史学会と浙江大学教育学院との共催）に関わることとなった¹。この時は、1日半ほど、上海図書館の調査を行うことができた。汪輝・王榮・潘静・今井

1 その概要ならびに雑感、 「国際研究集会に参加して」（アジア教育史学会『会報』15、2004. 5. 30）としてまとめている。

航・木村明史等諸氏の援助によって実現したのである。ちなみに上海図書館の古籍のカード・ボックスは四角号碼配列であり、筆者には極めて調べやすかった。こうして、条件さえ整えば、一定程度の史料調査も可能なのではないかと考えるようになった。

2. 旅行の概要

今回の旅行を決断したのは、二人の方のお誘いによる。一人は今井航氏であり、広島大学大学院教育学研究科（日本東洋教育史研究室）の博士課程後期3年に在学中であり、2004年6月より2005年3月までの予定で、研究指導の委託により北京師範大学教育学院に在籍中である。6月末の渡中に際して、一度来るように言っていた。その後今井氏からのメールで、北京師範大学に、相当数に及ぶ教科書コレクションの存在するとの情報を得た。その情報によればインターネットを通じて基本的な所蔵状況は確認できるとのことであったが、筆者にはよくわからなかったため、直接確認したいと考えた。

もう一人は王麗燕氏であり、広島大学大学院教育学研究科（教育社会学研究室）の博士課程後期2年に在学中であり、筆者とは専攻は異なるが同級生にあたる。王麗燕氏は、帰省を兼ねて調査旅行をされるとのこと。北京にも行かれるとのことで、お願いして便乗させて頂くことにした。王麗燕氏は長春で生まれ育ち、東北師範大学のご卒業。現在は大連に居を構え、広島大学に留学中である。

日程は王麗燕氏の予定に、筆者の予定を加味して立案し、下記のような行程となった。宿舎は安全性を最優先し、三師範大学の宿舎を利用することとした。

広島——（飛行機）——大連 [遼寧師範大学] ——（夜行列車）——長春 [東北師範大学] ——（夜行列車）——北京 [北京師範大学] ——（夜行列車）——大連 [遼寧師範大学] ——（飛行機）——広島

全行程王麗燕氏に同行いただいた。その間、大連で王麗燕氏の子息王星晨君と合流して三人で長春へ行き、北京では今井航氏と合流して大連へ行き、大連では王麗燕氏の姪の崔玉洁氏（10月より広島大学大学院研究生）と合流して、広島に帰着した。

この日程において、実際に史料を調査できたのは、東北師範大学・吉林省図書館・国家図書館分館での三箇所である。また北京師範大学図書館の情報なども得ることができ、その他若干記しておきたい事項もあるので時系列でまとめることとしたい。

3. 大連：8月21日（土）～24（火）

①遼寧師範大学

ア. 遼寧師範大学の概観： 遼寧師範大学の宿舎には前後併せて7泊した。従って中国

における大学の組み立てを知ることができた。遼寧師範大学にはあまり古い史料はないとのことであり、ここでは、中国の大学の様子ということで、概観的に記すこととした。

遼寧師範大学は王麗燕氏の父君である王桂氏の勤務校であり、比較的新しい大学である。王桂氏は、大学体制整備のために、東北師範大学より引き抜かれたとのこと。なお、王桂氏は、中国における比較教育史研究の大家の一人であり、特に日本教育史の研究者として高名な方である。なお王桂先生より、先生の御編著である『中日教育関係史』（山東教育出版社、1993）を頂戴することができた。

中国の大学は、一つの小さな町を形成しており、教育研究施設と共に、学生の寄宿舍・教職員の住宅・留学生の宿舍や生活上必要な隣接する商店・飲食店などからなっている。王桂氏の住居も大学の構内にあり、王麗燕氏のマンションも隣接している。王桂氏の住居は筆者の宿舍とも直線では極めて近い距離なのであるが、SARSの流行以来、近道は完全に塞がれて、一度大通りに出て大回りしなければならないことになってしまったとのことである。

イ. 遼寧師範大学図書館： 遼寧大学の図書館には筆者の求めるような古い図書はないとのことであったが、中国の図書館に慣れるために調査することとした。中国の大学図書館は基本的に大学関係者しか入館できないようである。筆者の場合は王桂先生の紹介ということらしく、王麗燕氏が手配して入館させてくれた。基本的に開架式図書館のようであり、古籍などを別置しているものか判然としなかった。カード・ボックスか冊子体の目録でもあれば何とかなるのだがどうも要領を得ない。コンピュータの端末で検索するように進められたが、早々に辞退して、教育関係の開架図書を少し閲覧し、教育史関係の新刊書のいくらかを複写した。

ウ. 教育学院・その他： 遼寧師範大学教育学院も訪問し、附属図書室において少し調査した。日本からの環境教育に関する調査団の講演があるとのこと、少し聴いて宿舎に帰る。その際に王桂先生から金世柏先生（中央教育科学研究院・元院長）を紹介していただく。

大連市立図書館や大連市档案館へも出かけた。大連市立図書館は生憎と月曜日休館とのこと、この辺は日本と同じである。また大連市档案館は、閲覧にはかなり複雑な手続きを要す紹介状を必要とするとのことであった。

4. 長春：8月25日（水）～28日（土）

①東北師範大学

東北師範大学は、伝統のある大学で、史料面でもおもしろそうである。王麗燕氏の二姉王麗光氏は東北師範大学の事務方に勤務され、重職にあるようである。

ア. 東北師範大学図書館（教育関係・歴史関係室）： 王麗燕氏の案内で図書館へ。ここも基本的に部外者は入室できないとのことである。筆者の場合は、王麗光氏の紹介ということになるようである。なお、王麗燕氏も、多数の知り合いが、各所におられるようであった。教育関係・歴史関係の開架図書を見るが、どうもめぼしいものは見当たらない。

イ. 教育学院・歴史学院の図書室： 両学院とも独立した建物で、独自の図書室を有している。どちらも王麗燕氏の案内で史料を閲覧することができた。教育学院では二点ほど興味深い史料を得たので複写を依頼した。どうも普通ではコピーできないような史料なのであるが、王姉妹の友人ということで許可されたようである。

- 国立編訳館主編『初級中学歴史』（第1冊）（国定中小学教科書七家聯合供応処、民国36年）
- 鄭徳暉著『読史及幼編』（四川成都存古書局、民国2年刊、同治甲戌序）

歴史学院の図書室は、完全に閉架の図書室のようで、担当の女性が一人おられた。幸いなことに、この女性は王麗燕氏の近所、同じ宿舎に住まわっていた方で子供のころ一緒に遊んだ方とのことであった。そんなわけで特別に調査を許されたようである。今回の史料調査は、調査対象をかなり限定しているので、直接複写に至ったものはないが、「眼の肥やし」となった。満洲帝国期の日本語著作を多数所蔵されているのも、中国においては貴重であろうと感じた。

ウ. 東北師範大学図書館（古典籍室）： 王麗光氏の格段の取りなしで調査を許可されたようである。洋装本室は入室を許可され、かなりおもしろそうなもののある手応えである。ただし線装本室は公開していないとのこと入室は不可能とのことであった。しかししたまたまカードボックス（四角号碼配列）が目に入り、調べて良いとのことなので、「中国歴史」（5000-6010-7121-5000）の当たりを見ると、すぐに2冊ほど興味深い書があり、王麗光氏のいううちだと思ひ、その場で閲覧を希望し、なんとか許可された。かなり異例のこのようで、相当のやりとりがあった。王麗燕氏の話では、あまりに早かったので、なぜわかったのかよくわからなかったようであり、どさくさ紛れといったところである。なお下記のような警戒感もあったのではないかと推測する。なお古典籍については冊子体の蔵書目録もあることがわかり、あらかじめ調べておくべきであった。

- 潘抑強著『中国歴史韻編』（中国孔聖学会弁事処、民国37年初版）
- 蔣維喬編『訂正 簡明中国歴史教科書』上下（上海商務印書館、戊戌年初版、中華民國16年33版）
- 『高等小学用最新中国歴史教科書』（上海商務印書館、光緒30年初版、宣統2年23版）

②吉林省図書館

王麗燕氏の友人の方の紹介を介して、調査を許可される。土曜日は、古典籍は閲覧できないとのことであったが、特段の配慮で担当者がわざわざ来てくれることとなった。

なお吉林図書館においては「表紙と奥付とを複写してはいけない」との指示を受けた。

- 趙懿年編『東洋歴史』（宣統元年九月発行、宣統三年正月再版、科学会編輯部）
- 本多浅治郎著『西洋歴史叢書』（湖北 興文社訳、光緒三十二年四月十日／明治三十九年五月三十日）
- 本多浅治郎著『西洋歴史教科書』（上海群益書社、民国元年十月十五日再版発行、原書出版社 湖北興文社／山左博文社）
- 邵振東訳『中国歴史問答』（光緒二十八年十月首版、商務印書館）
- 支那少年編訳『支那四千年開化史』
- 金兆梓編『新中学教科書 初級本国歴史』（民国十二年一月初版・十五年六月十八版、中華書局）
- 傅嶽葵編『中学 西洋歴史教科書』（宣統元年三月初版・三年正月三版、上海商務印書館）
- 陸軍部陸軍速成学堂印『中国歴史』（宣統元年秋季訂）

※長春における調査においては、王麗燕氏に終始同行頂いた。王氏は相当に人脈を駆使して調査を可能にしてくれた。その際に、筆者の調査対象を説明するのにかなり苦勞されたようである。つまりは、日中にわかまる「教科書問題」である。中国人にとって、日本人が過去の「歴史教科書」の「調査」に来たということになれば、身構えるのは極めて当然のことで、そこを丁寧に説明して調査に結びつけてくれたのである。

5. 北京：8月29日（日）～9月2日（木）

今井航氏と会い、日程を調整する。当初北京師範大学図書館の調査を希望していたが、今井氏の話では、学生証や紹介状がなければ入館は難しいとのことであった。これまでの遼寧師範大学・東北師範大学の経験からしても、もっともなことなのである。そこで、限られた日程の中でどこを調査するかを検討した。その他の場所では国家図書館・档案馆等を漠然とイメージしていたが、今井氏のアドバイスによって、国家図書館分館を集中的に調査することとした。

①国家図書館分館

国家図書館分館は、北海公園のほりにある。清代の宮殿らしく、なかなかの風情である。少しカードボックス（項目別・著者名画数別）を調べ、当りを付けると、今井氏が請求方法を確認してくれた。後掲の括弧内の通番によって請求するとのことであった。またコピーはできないが、写真撮影は可能とを確認してくれた。一冊当たり3分の1まで可能とのことであった。これで調査の目は立った。写真代は、民国期史料は見開き2頁5元、清末期史料は見開き2頁6元とのことであった。この値段は史料の年代や貴重度によって異なるようである。国家図書館分館・普通古籍閲覧室において閲覧し、一部写真撮影した史料は以下の通り。

- 商務印書館編『中国歴史教科書』7巻・2冊（商務印書館、光緒33年、鉛印本）〔史 109-8918(2943)〕
- 蔣蔭椿編『歴代史要』3巻・3冊（直隸学校司院院排印局、光緒年間、鉛印本）〔史 109-894(2945)〕

- 沈同芳撰『通州張氏家塾經史国文補習科答問』（上海、中国図書公司、民国元、鉛印本）〔社 850-914(14301)〕
- 晏彪・廖宇春同纂『世界歴史』（甘肅官報書局、光緒34年〔戊申〕、活字本）〔史 710-895(5880)〕
- 戴克敦・綫宗翰合編『中国白話史』（上海、彪蒙書室、光緒31〔乙巳〕、石印本）〔史 808-893(6703)〕
- 箕作元八・峰岸米造撰／華文祺・李激訳纂『泰西通史』4冊（上海、文明編訳印書局〔文明叢書第一編〕、光緒28年〔壬寅〕、鉛印本）
- 何琪編『皇朝紀略』（越郡北郷学光、山会北郷義塾史学課本、光緒27年〔辛丑〕、刻本）〔史 808-807(6705)〕
- 張茂炯等纂『続万国史綱目』8巻・3冊（杭州通記編訳局、光緒29年〔癸卯〕石印本）〔史 710-946-2(5887)〕
- 北洋陸軍編訳局編纂『亜洲各国史』二冊（甘肅官報書局、光緒34年〔戊申〕、活字本）〔史 730-8915(5897)〕
- 江楚編訳局輯『国朝事略』3冊（江楚編訳局、光緒32年、石印本）〔史 274-8937(2999)〕

②北京師範大学「解放前教科書コレクション」

今井氏からは、北京師範大学の「解放前教科書コレクション」の情報を伝え聞いていたが、インターネットを十分に操作できない筆者には、飲み込めない点があったので実際にインターネットを操作しつつ手ほどきを受ける。北京師範大学図書館 (<http://www.lib.bnu.edu.cn/>) の「特色資源」の「解放前中小学教科書」の項目をクリックして、歴史に関するものを単純に検索しただけで220種の教科書が出てきた。たとえば、筆者のみたいと思っていた最初の学部審定初等小学堂歴史教科書となる『蒙学中国歴史教科書』なども見え、その項をクリックすると「蒙学中国歴史教科書／(清)丁保書著／上海 文明書局 光緒32年(1906)／20版／138頁(環筒頁装) 図 19cm／本書于1903年8月初版。；初等小学堂学生用。 G624.411／005-1/0／北京師範大学図書館庫本閲覧室」という情報を得ることができた。

その後、今井航氏に現物の確認をお願いしたところ、北京師範大学図書館架蔵書は、丁保書著『初等小学堂学生用書 蒙学中国歴史教科書』（上海文明書局、光緒29年〔1903〕8月初版、光緒32年3月20日〔1906.4.13〕20版 定価・大洋3角）とのこと。なお北京文明書局、漢口文明書局、広東文明書局、南京文明書局の各地で印刷刊行されている。刊行時期から考えて、この書は、審定直前のおそらくは、審定作業に用いられた版と同一のものと考えてよいものである。上記の五ヶ所で印刷されたということは中国本部をほぼ網羅しており、この段階で20版を数えているということは、相当の売れ行きを示していた書ということになる。この版と「学部審定」の版を比較することができれば、学部審定の実態に迫ることのできる貴重な史料と考える。

次回来る時には是非調査したいものと感じつつ、日本に帰ってから、インターネットを開けないこともあるかと思ひ、基本的な事項だけを貼り付けて帰国した。なお、やはり日本に帰国後開こうとしたが開けなかった。コンピュータに精通している立正大学大学院研究生の木村明史氏に確認した所、イントラ情報で、学内にのみ開かれている情報とのことであった。日本において開くことができれば、少し整理して紹介してみたいとも考えたが、歴史教科書は日中韓において微妙な問題もあるようなので、状況も勘案し

て次の機会を待つこととしたい。

6. 大連：9月3日（金）～7日（火）

再び大連へ。王麗燕氏・今井航氏と三人で行く。筆者の体調も下降気味で、若干の見学と史料の整理の時間に当てる。大連は季候も良く、過ごしやすかった。北京に短期間の滞在であった筆者はさほど感じなかったが、今井航氏は、盛んにそのことを強調されていた。なお7日の広島は記録的な台風で、台風一過の混乱の中の帰国となり、部屋にたどり着いた時は夜半を過ぎていた。

おわりに

今日の中国研究者にとって、渡中して史料を求め、現地の状況を学ぶことは何ら特記すべきことではない。したがって、経験豊富な方々からみれば、不十分な旅行である。しかし筆者にとっては得ることの大きな旅行であった。可能ならば追加の調査を行い、史料の一層の発掘に努めたいと考える。また中国の史料状況に精通されている諸賢には是非ご示教を賜りたいとも考える。

末尾ながら、今回の旅行を全面的に支えて頂いた王麗燕氏に感謝の意を表して結びとしたい。